

「産まれたばかりの子牛」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「遙かなる山の呼び声」という映画がある。山田洋次監督、高倉健・賠償千恵子主演、道東の小さな牧場を舞台とした、悲しくも美しいストーリーだ。



絵は、警察に追われて農場に身を隠している田島(高倉)のもとに会いにきた、函館の兄(鈴木瑞穂)を見送るシーン。ロケ地になった上武佐駅(かみむさえき)は標津線の廃止で現在はなく、駅跡はくさむし、記念碑だけがさみしくたっている。

どのシーンも印象的で、日本映画の傑作の一つと言えるだろう。ラストシーンは別格だが、私は嵐の晩の牛の出産シーンが心に残っている。



先日、そのシーンを思い出させるような子牛に出会った。野辺山の牧場である。この乳牛は、産まれてまだ数ヶ月だが、もう肢も顔立ちもしっかりしている。



もっと小さい子牛もいた。藁が敷かれた囲いの奥で、ちょっとおびえた様子で立っている。牧場の飼育員さんに聞いたら、事も無げに「さっき産まれました」と教えてくれた。牧場では子牛の出産は珍しいことではなく、日常的に行われているのだろう。それにしても、産まれてすぐに立ち上がって歩けるといのは、ヒトの新生児とは大きなちがいである。ヒトは生物的には「非常に未熟な状態」で生まれてくると言って良いだろう。ネズミやウサギも同じである。



この子牛をよく見たら、おなかにはまだへその緒(臍帯)が残っていた。このままにしておいても、自然に干からびて落ちるのだという。

さて、胎児には臍帯を通して、母親の血液が直接流れ込んでいると思っている子どもは実に多い。子どもだけでなく、大学生でもそう思っている人が大勢いる。しかし、ヒトを含めた哺乳類では、母親の血液と胎児の血液は決して混ざり合うことはない。胎盤を通して、さまざまなものを交換しているのである。従って、臍帯を流れる血液は常に胎児のものだ。私は、5年「ヒトの誕生」の単元は、ここが大切だと考えている。